

(1) ヴィクトリアニズムの歩み

ヴィクトリアニズムの歩み

—

一九三二年に出た『オックスフォード英文学伴侶辞典』は、「ヴィクトリアン」という語を次のように定義した。

「ヴィクトリア女王朝に典型的であると考えられる事物（精神的または物質的）または人物（著者、芸術家、政治家その他）に適用される形容辞。この形容辞が時折用いられる場合、言及される特質は、礼儀作法道徳の標準が向上したこと、富の増大、国民全体の繁栄、莫大な産業的科学的発展から来る自己満足の念、

謹直を意識してユーモアのセンスに欠けていること、権威や正統の無条件な受け入れ、である。」

山田泰司

この定義は、最近改訂された同辞典の第四版（一九六七年）でも、完全にそのまま踏襲されている。つまり、この辞典の編者は、初版と第四版との間に四〇年近くの隔りがあるにもかかわらず、ヴィクトリアンという語の含む意味になんらの修正も加える必要を感じなかったわけ、それはそれとして、ひとつの見識を示すものではあろう。なぜ、このようなことが気にかかるかといえば、およそヴィクトリアンおよび「ヴィクトリアニズム」（ヴィクトリア朝風）ということばほど、その含む意味

が時代とともに、激しく揺れ動いてきたことばは少ないからである。

ヴィクトリアンという語は、奇しくも、ヴィクトリア女王時代が最盛期に入ろうとする先触れであるかのよう  
に、ハイドパークの水晶宮で万国大博覧会が盛大に催されたのと同じ年、すなわち一八五一年に、はじめて文獻  
で用いられたことが確かめられている。そのころ、そしてその後しばらくは、このことばは、英国の繁栄と安定  
を謳歌することのできることへの誇りと喜びにあふれた響きを伴って用いられたに相違ない。ところが、一八九  
〇年代にはすでに、このことばは、好んで軽べつ的な意味合いをこめて使われるようになっていた、といわれる。  
時代的には、まだヴィクトリア女王時代(一八三七—一  
九〇一)の中に生き、英帝国の富を喰いつぶしながら、しかも自分の属する時代に対してあきたらぬものを感じ  
始めた世代が育ちつつあったのである。そして、こうした傾向は、一九二〇、三〇年代には支配的になった。第  
一次世界大戦が起こったのは、ヴィクトリア朝文化に欠陥があったからだ、その方向が間違っていたからだ、と  
いった説がとねえられたりした。このころ、ヴィクトリ

アンという語の含意は最も甚だしく下落したといつてよい(「ヴィクトリアニズム」という語が、軽べつ的な意味をこめて文獻にはじめて現われたのは、『オックスフォード英語辞典』によれば、一九一三年である)。二、三〇年代に、ヴィクトリア朝の人々が、批評家や文学者たちによって、どのような矛盾する非難を浴せられたかについて、バックレーは『ヴィクトリア朝気質』(一九五一)の中で、次のように記録している。

われわれは聞かされているのだが、ヴィクトリア朝の人々は、「気の毒な、先の見えない、満足し切った人たち」であったが、それにもかかわらず、疑念にさいなまれ、精神的にうろたえ、混乱した宇宙の中で途方にくれていたのであった。彼らは、現在に没入して「抽象的な真理や永遠の価値に対して」われ関せずといった、救いようのない唯物論者であったが、また同時に、極端に宗教的でもあり、嘆かわしいほど理想主義的で、過去にあこがれ、かなたの世界を夢想するために現在の楽しみを見合わせる用意があった。奴隸的な「大勢順応」、愚鈍な因襲尊重にもかかわらず、彼

らは、「やりたいようにやること」に夢中で、教養や偉大な伝統を顧みない「徹底的な個人主義者」であり、権威ある偶像を崇拜した偶像破壊者であった。さらに彼らは、感傷的な人道主義者であると同時に、自由企業の非情な擁護者でもあった。政治的には、偏狭な偏見に支配されていたが、暗い帝国主義的下心にゆずぶられていた。知的にも感情的にも進歩を信じ、原罪を否定し、悪魔の死を肯定したが、それにもかかわらず、生きることは、善の力と暗黒の力との必死の闘争だと見るマニ教徒であったことも明らかである。「男らしさ」を信奉すると公言しながら、彼らは女性的標準に屈した。女性を積年の束縛から解放したにせよ、彼らは、社会におけるきわめて重要な地位を女性から奪ってしまった。性的に抑圧されていて、肉体的愛の存在など考えてもみなかったが、信じられないほどたくさんの子供をつくり、詩の中で、病的に発達しすぎた色情的感性をひけらかした。彼らの芸術は、偽善と純真さとの破廉恥な記録である。そして、彼らの文学は、どこまでも、あまりに明確な目的を持ち、宣伝臭が強すぎ、教訓的にすぎて、読者に対してあまりにも見え

すいた意図を狙っているものの、明らかに、きわめて  
伝奇的、唯美的、「現実逃避的」であって、意味ある  
たよりを後世に伝えてくれない。

もう一度、おことわりしなければならぬが、これは  
バックレー自身の見解ではなく、すべて、二、三〇年代  
の文学者や批評家たちの「評価」である。個別に取り  
上げれば、これらの意見のおおのが、一面または半面  
の真理を含んでいることを認めてもよいかもしれない。  
しかし、これを全体として眺めるとき、いかに奇怪なヴ  
ィクトリア朝人像が浮び上って来ることであろう。当時  
の文学者、作家たちは、新しい世紀における自己の立場  
を確立するために、このようにゆがんだヴィクトリア朝  
「人種」像を造り上げる必要があったのである。

## 二

この時期に書かれた、すぐれたヴィクトリア朝史、た  
とえばトレヴェリアンの『十九世紀英国史』(一九二二)、  
G・M・ヤングの『ヴィクトリア朝の英国、時代の肖像』  
(一九三六)などを読めば、その当時でもヴィクト

リア朝について穩健中正な見方をするのできる人たちがいたことを知らされるが、文学者や批評家の意見の方が、いっそう鮮明に、当時の一般の人々のヴィクトリア朝觀を代弁していたのであった。そして、これら文学者、批評家たちの、たがいに矛盾することはあっても、思い切りのよいヴィクトリア朝觀のいくつかが、一般の人々の好みにも合っていたのである。こうして植えつけられたヴィクトリア朝觀は、今日でも一般の人の間から完全には取り除かれていないように思われる。(たとえば、『ペンギン英語辞典』(一九六五)には、「ヴィクトリアン」の義解として、「とりすました」、「チェイムバーズ・二十世紀辞典」の新版(一九七二)は、「道徳的に厳格ではあるが、いささか因襲的で、上品ぶったり、もったいぶる傾向のある」という意味を与えている。)

こうして作り上げられたヴィクトリア朝像が、まったくの虚像であったと言いつけることはできないにせよ、それが多分にゆがんだ像であり、神話に近いものであったことは否めない。当時、自分の意見を持ち始めた人たちは、父親であるヴィクトリア朝人に対して、いわば男子の關係にあつた。自分の成長のためには、まず父親を

倒すことが必要であつた。客觀的に、まして同情をもつて眺める余裕などなかつたのである。

### 三

しかし、一九三九年に第二次世界大戦が勃発し、ゆくえを知らぬ戦争の成り行きに直面させられて、英国民の多くは、次第に、比較的安定していたと考えられるヴィクトリア女王時代に対して郷愁を覚え始める。ある意味では最もヴィクトリア朝的な作家といわれるトロロップが、一般の人々の間に読み返えされ、趣味低俗と見なされて、それまで顧みられなかつたヴィクトリア朝の家具類、装飾品さえ、見直され尊ばれるようになる。四十年代の終りに書かれた一文学者のことばは、ヴィクトリア朝に対する明らかな意識の変化を物語っている。

この不愉快な世紀において、われわれは大部分、難民なのだ。そして多くの者は、約束の地に逃げ込むように十九世紀の中へと逃げ込み、不法移住者のように、そこに定住して余生を送りたいという思いに誘われる。あの遠い山国では、今日のわれわれに欠けているすべ

(5) ヴィクトリアニズムの歩み

てのものが、豊かに存在しているように思われるのである。平和、繁栄、豊かさと自由ばかりか、信仰、目的意識、心の明るささえ。(バジル・ウィリー『十九世紀研究』一九四九)

このようなヴィクトリア朝賛美は、戦後の不自由と窮乏に促された衝動的発言のように聞えるが、戦後の一時期のヴィクトリア朝観の典型をなすものであった。ヴィクトリア朝が黄金時代のように見えた時期がたしかにあったのである。それは、前世代のヴィクトリア朝観に対する反動でもあった。しかし、生活がようやく安定を取り戻し、ヴィクトリア朝からの距離が大きくなるにつれて、英国人は好悪の感情を交えずに、前世紀を理解しようという気持になる。十九世紀またはヴィクトリア朝というものを、その多様性と複雑さのままに理解しようという気運が起こって来る。そう言うては言いすぎであるとするれば、少なくとも、私心のない好奇の目で眺めようとする心のゆとりが生じてきたとはいえよう。本格的で、しかも一般人にもおもしろく読める研究書、たとえば、エーサ・ブリッグズ『改善の時代、一七八三—一八六

七』(一九五九)、『ヴィクトリア朝の都市』(一九六四)、『ヴィクトリア朝の人々』(一九六五)、W・L・バーン『均衡の時代、中期ヴィクトリア朝の研究』(一九六四)、J・F・ハリスン『初期ヴィクトリア朝の人々、一八三二—一八五二』(一九七二)、ジェフリー・ベスト『中期ヴィクトリア朝の英国、一八五一—一八七五』(一九七二)その他が続々と出版されつつある。こうしてヴィクトリア朝文化は、反撥から賛美へ、そして今、賛美から理解への道を着実に進んでいるように見える。

四

この間、ヴィクトリアニズムはどうなっているであろうか。反撥の時期には、むしろ、軽べつ、嘲笑または冷笑の対象としての「ヴィクトリアニズム」が、確かに存在したと言えるであろう。それが、いかに客観性を欠いたものであったとしてもである(もともと、ヤングは、三〇年代に「ヴィクトリアニズムなるものは神話である、とかねてから確信していた」と言っているが)。

ヴィクトリアニズムということばは、実体(または、実体と思われるもの)が存在していて、または実体が見

付けられてから造られたのか、それとも、ことが先に造られて、あとから「実体」をそれに当てはめたのか、不分明なところがある。贅美の時代には、「ヴィクトリアニズム」(特に軽べつ的な意味での)は存在しないと主張されたものであった。次の理解の時期に入ると、ヴィクトリアニズムという語は、ニュートラルな、または客観的(であろうとする)意味合いで用いられ始めたことが特徴的である。たとえば、この語および「ミッド・ヴィクトリアニズム」という語を、引用符なしで、ひんばんに用いているデイヴィッド・トムソンは、

ヴィクトリア朝の英国を堅苦しい自己満足と黒のシルクハットをかぶった道徳的気どりの国と考えるならば、その時代の英国の持つ意味全体が失われてしまう。そのむっとするたが入りのベチコートや、きたない一頭立て二輪馬車、そのガス燈に照らされた家々や飾り立てた掛け布は、すばらしく興味をそそる冒険——産業人を民主主義社会に適合させようという大胆な実験——に従事する国民をおおい隠していたのである。彼らの失敗、過失、笑うべき欠点は、すべて明々白々で

ある。しかし、リットン・ストレイチー氏が「著名なるヴィクトリア朝人士」の短所を笑うことのできた時代は去った。われわれ自身まだ解答を見出していない諸問題を解こうとした曾祖父たちの試みを、今日のわれわれが笑うことができ、かどうかを自らに問わねばならない。『十九世紀の英国』一九五〇)

ここには、まず現代について反省し、過去をできるだけ公平な目で眺め、その裏にひそむものを見抜こうとする誠実な歴史家の声が聞かれよう。このような態度が、今日のヴィクトリア朝研究家に共通する姿勢となっていないことは言うまでもない。

## 五

一九六〇年に、G・キトスン・クラークがオックスフォード大学で行なったフォード講義は、のち『ヴィクトリア朝英国の成立』と題してまとめられたが、この中でクラークは、ヴィクトリア朝の英国を形成したと言われてきた要因のいくつかを再検討し、また、その存在が無視されてきた要素を指摘して、将来のヴィクトリア朝史

(7) ヴィクトリアニズムの歩み

執筆の指針を提示しようと試みた。筆者は、この本を全体として理解し、紹介批評するだけの専門的知識を持ち合わせていないが、クラークが指摘している事項のいくつかが、文学研究者にとっても示唆的であることを認めないわけにはいかない。たとえば、ヴィクトリア朝文学史または研究書には、「台頭しつつある中産階級」とか「優勢な中産階級」とか、「中産階級の趣味」とか、「中産階級のモラル」といった語句が、ひんばんに出てくるのが常であるが、正確に言って、中産階級（ミドル・クラス）とは、一体誰であったのか、と問われれば、貴族および地主階級と週給または筋肉労働者との中間の階級とぐらいいか答えることができないのではないか。そうだとすれば、リヴァプールの豪商も、ロンドンのシテイの銀行家も、エクセターのリンネル物商も、ディケンズの小説によく登場する小生意気な、きたならしい事務員も、すべて、いっしょくたに中産階級の中に含まれてしまうわけで、この階層はひどくふくらんでしまうことになる。われわれは、クラークの言うように、収入、職業、教養などの点から、このことばによって言及される階層について、もっと精密に考える必要があるだろう。

また、「ヴィクトリアニズム」の一項目によく数えられる「上品ぶり」についても、クラークは、次のように注意を喚起している。

ヴィクトリア朝のお上品ぶり、とりわけヴィクトリア朝の淑女ぶりという話題全体が、まじめな歴史的分析の対象としてよりは、むしろ風刺あるいはユーモア、あるいは憤慨の対象として考えられてきたことは、きわめて不幸なことである。こうした事態の進展は、ヴィクトリア朝または十九世紀よりもずっと以前に明らかにさかのぼる歴史の一章と考えるべきであって、本質的には、洗練と文明を旨とせず戦いであり、とりわけ十八世紀においてさえ普通であった風俗紊乱、獣性、野蠻、野卑に対して女性をよりよく守るために戦われた戦いであるように思われる。不幸にして、この戦いは、どこで戦われようと、やがて多くの点で不必要で、極端に煩わしい礼儀作法を発達させ、よくて精々、ばかげたタブーを助長し、時として極端に残酷な社会的おきてを押しつけることになりやすい。時には、ある点で道徳に重みをかけすぎたり、宗教をむざんにもゆ

がめることにもなる。しかし、このような事態の発展を判定しなければならぬ場合、これらが發達するにいたった事情や、これらをもって制するつもりだった弊害(こうした弊害が十九世紀に入っても続いてきたことの十分な証拠は、ヴィクトリア時代の街路や鉄道の駅やその他の場所で起こり得ることの中にあり)を思いおこすことが公平というものである。

たしかに、これは指摘されれば、多分その通りであつて、「中産階級のモラル」と呼ばれているものは、伝統的な貴族古来のモラルのゆるみと、新しい都市労働者階級のさらけにさう甚だしい野蠻状態に対する、都会化されて日の浅い、したがって組織不十分な社会における防衛であつたと見ることが出来る。女性が付添人なしで外出することがなかったとすれば、それは淑女ぶる女であつたばかりでなく、そうでもしなければ、酔っぱらいから強奪されたり、誘いをかけられたり、あるいは暴行を受けるおそれがあるからなのであつた(アルコール中毒は、当時の社会問題のひとつであつて、労働者を雇う際に雇用者の悩みの種であつた)。ロンドンやその他の

大都市の暗黒街の住人たちが呈する、悲惨で不快な光景は、外国からの觀察者から、しばしば酷評を招いたものである。したがつて、狹量と見られるほど体裁を重んじる人たちは、みだらな野蠻国の中の文明人と自分を見なすことで、かなり正しい社会的評価をしていたのだ、とも言えるのである。彼らは、自分たちが、少しでも品行方正のルールからはずれれば(はずれたことが露見すれば、と言つた方が正確かもしれない)、女性たちは必ず墮落してしまうだろうと確信していた。こうしたルールを自らに課することは、神の恩寵を失わないでいること、外に現われたしるしでもあつた。そのしるしとは、聖書をひんぱんに読むことであり、家族そろつて朝夕の祈りを欠かさないことであり、安息日を厳格に守ることであり、さらにきびしい家庭では、トランプをやらないことであり、酒類に手をつけないことであり、女性の前では流産とか下水のことなどを話題にしないこと、等々であつた。こうした習わしを、今日の目から、非難したり嘲笑したりすることは、まことにやさしい。しかし、それらが、どのような社会的または精神的必要を満たしていたかを考えて見ることのほうが大切である。

(9) ヴィクトリアニズムの歩み

ヴィクトリア朝文化を、できるだけ偏見を持たずに再検討しようという動きが高まるにつれて、ヴィクトリアニズムについての理解もかなり深まってきたことは確かである。二、三〇年代に横行した、文学者、批評家などによる高みからの批判的態度に代わって、歴史家、文化史家による、十分な資料を駆使した客観的な研究態度が支配的になった。このような研究のみごとな成果のひとつは、さきあげたエーサ・ブリッグズの『改善の時代』であろう。この本は一七八三年から一八六七年までの時期を、近代英国の形成期と見て、この時代の政治、経済、社会、文化を縦横に論じたものである。ブリッグズは、ヤングのように「ヴィクトリアニズムは神話だ」といったエレガントな立場は採らない。それはかりか、わざわざ「ヴィクトリアニズム」という一章を設けて、これと正面から取り組んでいる。ただ、ブリッグズの言うヴィクトリアニズムとは、ヤングの時代に流布していた引用符付きのヴィクトリアニズムのことではなく（イズムという接尾辞はとかく「好ましからざる傾向または特徴」という感情的な含みを加えがちである）、純粹に学問的に考えられたヴィクトリア朝社会の特質というほ

どの意味である。

ヴィクトリアニズムという概念が、当時あまねく受け入れられていた道徳的、社会的概念であったわけではない、とことわりながらも、ブリッグズは、その主要素として、勤労主義、性格の「まじめさ」、体面を重んずること、自助の精神、の四つをあげて、これらについてかなり詳しく論じているが、これら四つの特質は、冒頭にかかげた『オックスフォード英文学伴辞典』が「ヴィクトリアン」ということばの定義の中で、この語が用いられるとき言及される特質として取り上げているものと、根本では重なり合う部分が多いことに気付く。ブリッグズのいう勤労主義の結果、「富の増大、国民全体の繁栄」がもたらされ、「自己満足」が生じ、性格の「まじめさ」は「謹直を意識してユーモアのセンスに欠けていること」につながり、体面を重んずることは「礼儀作法道徳の標準が向上すること」に帰着するであろう。『辞典』の編者は、ヴィクトリアニズムに対する反撥の時代であった一九三〇年代において、それに対して公平な判断をしていくことになる。六〇年代の第四版でも修正を加える必要を感じなかったのである。

## 六

ヴィクトリアニズム理解の時代が訪れたとは言っても、ヴィクトリア朝社会または文化の特質として、どんな要素を取り挙げるかということについては、研究者の間にかんがりの不一致が見られるし、またこれは当然でもあろう。たとえば、同じ資料、文献を用いても、それについての推論のし方は、研究者によって、それぞれ異なるのが自然であろうから。

しかし、ヴィクトリアニズムなるものが、女王が一八三七年に即位して以来、在位六十四年間に除々にきわ立つようになり、後期に至って最も顕著になったというような特質ではなく（むしろ、後期には弱まったと見られる）、今日記憶されているその特色の大部分を、十八世紀後半から、一八三〇年代まで——すなわち女王の即位以前の事態の進展に負うている、と考えることでは、諸家の意見は大体一致している。（これをブリッグズは「ヴィクトリア以前のヴィクトリアニズム」と呼んでいる。）しかも、そうした進展の原動力となったものが、ジョン・ウェズレー（一七〇三—一九一）が中心になって一七

四〇年ごろ起こしたメソジスト派の運動であり、ついでウェズレーの感化を受けて英国国教会の内部での改革運動として盛り上がりを見せた福音主義の信仰復興運動であったことに関しても、諸家の見解は一致している。

（因みに、「メソジスト」という名称は、元来、一七二九年にウェズレー兄弟（ジョンとチャールズ）が、オックスフォード大学内に作った宗教団体につけられたあだ名で、彼らの研究および礼拝がきわめて組織立っていたことをあざけるよび名であったが、やがてこれを彼らが自分たちの正式の名称として採用したものである。のち、彼らの運動に参加または共鳴する者たちをさす一般的名称となった。「メソジズム」と「エヴァンジェリカリズム」（福音主義）という名称は、十八世紀後期から十九世紀初期までは、ほとんど意味上の区別なく用いられたが、のち、前者を英国国教会から分離したウェズレー派に、後者を同教会内にとどまって活躍したウェズレー派に当てるのが普通になった。以下では、「福音主義」という訳語を、メソジスト教をも含む意味で用いる場合があることをおことわりしておく。両者の間に、教義上問題となるような差はなかったからである。）

福音主義者たちが立ち上った十八世紀四〇年代から後半にかけて、英国国教会は、分別を宗とする倫理と純理的な正統論によって特色づけられた宗教に安んじていた。国教会の牧師たちの多くは、キリストの使徒としての自らの使命を顧みず、無感動、無関心のままに、安閑として日々を送っていた。良心の痛みを感じない教会の時代であった。国教会は、トーリー党の祈禱部になり果てていた。国教会の主教や牧師の中には、十年に一度しか信徒を訪れない怠け者も少なくなかったし、いくつかの教会を掛け持ちして収入をふやすことを心掛けていた者も多かった。牧師志願者の多くは、士官候補者の多くと同様、上流階級出身の若者たちで、聖職に身を捧げようなどという抱負など全く持たずに、ただ社交界に乗り出すための手段として聖職を利用していたにすぎなかった。

一七三九年の回心以後、ウエズレーは、英国における精神生活の復活を実現するためには、熱烈な訴えによって、まず一般大衆に呼びかけるほかはないと感ずるようになる。彼は、よるべき権威として、哲学者や聖書注釈者にはなく、聖書のことばそのものによった。ウエズレーにとって重要なことは、ただ一つ——天に至る道

であった。そのただ一つの道は、人間の導きのために神自身が与え給うた本を通してしかなかった。ウエズレーの信条の要点は、(一)確かな信仰の基礎として理性を斥けて、知的にはなく、すなおな心で聖書に近づき、それを文字通りに解釈すること、(二)人間とは心の底の底まで墮落した存在であるという認識、(三)人間は信仰によってのみ救われるのであって、信仰を伴わない善行は無益であるという信念、この三つであった。これは、宗教における「ロマンティズム」であった。それは理性の時代——十八世紀初期——に対する反逆であるという意味で、何よりもロマン主義的であった。また、福音主義は、その本来の特質として、個人の魂の救済を旨とするものであり、社会の現状を改革しようという意図を持たなかった。その意味では、保守的な一面も持っていた。

福音主義を十九世紀英国史の原点に据えたのは、「偉大な十九世紀英国史」(クラークの賛辞)を書いたフランスの歴史家エリー・アレヴィーであった。

……十九世紀を通じて、福音主義信仰は、英国社会の道徳的きざなであった。英国の貴族にほとんどスト

イックとも言える威厳を帯びさせ、一般大衆から成り上ったばかりの富豪を俗悪な見えと遊蕩から妨止し、無産階級の上に、美德を熱愛し自制心のある労働者選抜隊を置いたのは、福音主義者たちの影響力であった。かくして、福音主義は、革命勢力の爆発によって一時崩された均衡を英国において復活させた保守的な力であった。〔十九世紀英国史〕

また、ヴィクトリア朝の英国社会において福音主義の果たした決定的な役割について、ヤングは次のように述べている。

〔一八一〇年に生まれ、一八三〇年に二十歳になった若者は〕、到る所で福音主義的規律という計ることのできない圧力によって抑制され、また進歩に対するほとんど全般的な信仰によって鼓舞されたことである。……福音主義者たちは、この島国に、そのモラルと力との基礎である信条を与え、さらに信条とともに、

自分たちが選民であるという意識を与えた。そして、そうした意識は、のちには、もっと騒々しい調子に合わせられて、後期ヴィクトリア朝帝国主義における主要な要素となったのである。……一面においては、ヴィクトリア朝の歴史は、福音主義によって授けられたエネルギーを用いて、福音主義によって感覚、知性、娯楽、芸術、好奇心、批評、科学に対して加えられた抑圧の数々を排除しようとする英国精神の物語りである。……福音主義的規律は、やがて世俗化されて体面尊重となるのであるが、それなくしては崩壊したかもしれない国家において最も強力な結合力なのであった。〔ヴィクトリア朝の英国〕

これは、一見、まことに大まかな一般論と思われるかもしれない。しかし、ヴィクトリア朝の諸事実は、この大胆な一般論を圧倒的に裏書きしているように思われる。

(一橋大学教授)